

対音資料研究法叙説——case2: 蒙古字韻(3)

(前号より続く)

7. 声母の 3 項対立

パスパ文字漢語表記では、破裂音声母および破擦音声母に 3 項の対立がある。等韻学の用語で言えば、「全清」「次清」「全濁」の 3 項であり、中古音ではそれぞれ「無声無気」「無声有気」「有声」に相当する。13～14 世紀のパスパ文字表記におけるこの 3 項対立は、伝統的な等韻学の枠組みを保守した結果として用いられたもので、具体的な一地方の言語の音声に基づいたものではない。しかし過去には、この 3 項対立が臨安(杭州)方言のように実際に 3 項対立を有する方言の反映と見なされたこともある。そのような例として、ここでは服部四郎 1946 の説を検討してみたい。

8. 服部説

服部 1946:55 頁には次のようにある。

世祖が大都に遷都したのが至元元年(西暦 1264 年)であり、帝師八思巴をして国書即ち八思巴字を作らしめ、之を天下に行はしめるやう詔したのが同じく至元六年であるが、この都は金の中京であったこともありその方言は当時既に相当の勢力を持ってゐたものと考へられるが、八思巴字で表はされる漢字音が何故に大都音ではなくて、清音・次清音・濁音の区別を保存する別系統の音であったのであろうか。

このように服部氏は声母の 3 項対立を所拠方言を考える際の最大の特徴と見なして、パスパ文字で表された漢字音を大都(北京)音とは別の系統の音とした。具体的には南宋の都であった臨安(杭州)の音に拠ったものと考えたようであるが、その詳細な記述にもかかわらず説得力のある仮説とは言えない。

服部 1946:54-55 頁に述べられた論法はおおむね以下のようなものである。

- ① 『蒙古字韻』の著者朱宗文は、序文によれば『古今韻会』を重んじた。
- ② 『古今韻会』の編者黄公紹は南宋の都臨安の言葉を正しいと考えた可能性が高い。
- ③ 宋の南遷により汴京音が臨安に移植され、臨安地方の俗音とは異なる形に保存されて標準音と見なされたと想像できる。黄公紹はこれを観察したのであろう。
- ④ 濁音が保存されているのは、12 世紀の南遷の際にはまだ汴京音で濁音が失われていなかったからであると考えることができる。

以上の論は、想像に想像を重ねたもので、検証が不可能である。すでに現存しない『古今韻会』というブラックボックスから論を展開したために無理を生じているのであるが、最も大きな誤りは朱宗文を『蒙古字韻』のオリジナルの著者と見なしたことである。朱宗文以前に種々の『蒙古字韻』のテキストが存在したことは「校正字様」に明らかであり、朱宗文は校訂者に過ぎない。したがって、上の①は校訂に際して『古今韻会』が参考にされた可能性を示すにとどまる。つま

り、服部氏が拠り所にした『古今韻会』および編者の黄公紹は、もともと『蒙古字韻』やパスパ文字漢語表記の所拠方言問題と直接の関連を持っていないのである。

『古今韻会挙要』と『蒙古字韻』の韻母は細部にわたるまでよく一致するが、それは服部氏が考えたように両書がともに『古今韻会』に基づいたからではなく、『古今韻会挙要』の韻母の分類がパスパ文字漢語表記の綴りを参考にして作られたことによる¹。

『蒙古字韻』が『古今韻会』に基づいたという服部氏の誤解は、その後坂井健一 1952 や中野美代子 1964 にも受け継がれた。

一方、パスパ文字漢語表記における声母の 3 項対立については、まず Hashimoto1967 が実際の音声を反映しない人工的な区別である可能性に言及し、Pulleyblank1970 や Cheng1985 はより積極的に 3 項対立が伝統的な規範に従った人工的な区別であるという論を展開している。

9. 声母の対応

パスパ文字漢語表記における声母の 3 項対立(全清・次清・全濁)が韻図等の規範に拠った人工的な区別であることは、いくつかの点から確認できる。その中で最も大きな問題は、チベット文字との対応である。

パスパ文字の字形はほとんどがチベット文字から受け継がれており、一部を除けば対応は容易である。したがってパスパ文字のローマ字転写も基本的にはチベット文字の転写を参考にしてなされた。チベット文字の「k」「k'」「g」はパスパ文字でも同様に転写される。さて、パスパ文字モンゴル語表記では通常、有声音/gはパスパ文字「g」で、無声音/kはパスパ文字「k'」で表記される。これは自然な処置で問題とすべき点はない。ところがパスパ文字漢語では次のように、不可解な表記法が取られる。

見母(中古音[k])をパスパ文字「g」で表記する

溪母(中古音[k'])をパスパ文字「k'」で表記する

群母(中古音[g])をパスパ文字「k」で表記する

チベット文字に「無声無気」「無声有気」「有聲」に対応可能な文字が用意されていたにもかかわらず、パスパ文字漢語ではその対応が混乱している。この不合理な対応はパスパ文字漢語が、3 項対立を有する方言の音声に基づいて体系化されたものでないことを雄弁に物語る。この不合理な対応に対する服部 1946:67 頁の説明が興味深い。

当時の蒙古人及び支那人は、蒙古語音と支那語音とを比較する場合に、蒙古語の有声乃至は半有聲の音を支那語の無声無気音と、蒙古語の無声帶気音を支那語の無声有気音と同一視するのがほとんど常識であったために、支那語の無声無気音は八思巴字の濁音字母で、支那語の無声有気音は八思巴字の次清音字母で写すといふ主義が確

¹ 『古今韻会挙要』における韻母の分類には随所に合理的でない部分が見られるが、それらは全て実際の言語音を吟味せずにパスパ文字の綴りを機械的に参考にした結果である。詳細は中村雅之 1994 を参照されたい。

立した。そこで、蒙古語にはない支那語の濁音(有声乃至は半有声の帯気音)を表はす必要が生じ、西藏字の清音字母から作った字母をこれに当てることとなった。

このように、服部氏はパスパ文字の漢語表記がまず蒙古語音との比較から始まったことを指摘しており、それは全く正しい。そうであるならば、論理的に、パスパ文字漢語の3項対立が漢語の実際の音声に対応させて出来上がったものでないことになる。蒙古語音と比較すべき漢語の声母が(カテゴリーとしての全濁音を持たない)2項対立であったからこそ、「蒙古語の有声乃至は半有声の音を支那語の無声無気音と、蒙古語の無声帯気音を支那語の無声有気音と同一視するのがほとんど常識であった」のである²。見かけ上の3項対立を完成させるために、「全濁」声母にチベット文字の無声無気音の字母を当てたと考えられる。

声母体系の虚構性は、「夢」「目」「謀」などの声母を微母相当の「v」で表記する点にもうかがえる³。

10. 声母表記の保守性

パスパ文字漢語では、韻母(特に入声韻)は北方音の特徴を明瞭に示し、声母においても舌上音(知・徹・澄)と正歯音(照・穿・床)の合流など実際の音声に合った扱いとなっているが、声母の3項対立については北方音によらず、伝統的・規範的・保守的である。

このような扱いは『蒙古字韻』あるいはパスパ文字表記に限ったことではない。宋元の音図は押しなべて全濁音を保存しているし、対音資料でも『洪武正韻訳訓』(1455)の「俗音」や諺解本『老乞大』『朴通事』(16世紀初)の「左側音」など、北方音を記したハングル表記にもやはり全濁音が用いられ、3項対立になっている⁴。

声母体系の見直しは声調体系の再構築を伴う。諸資料が3項対立を守っているのは声調体系を含んだ体系の見直しに躊躇したことも一つの理由ではなかったか。『中原音韻』に至って、はじめて声母と声調の体系が同時に大改編されることになった。

<参考文献>

服部四郎 1946. 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』, 東京: 文求堂.

坂井健一 1952. 「古今韻会挙要の特色について」, 『中国文化研究会論集』2-4.

中野美代子 1964. 「蒙古字韻の研究—音韻史的考察—」, 『外国語外国文学研究(北海道大学)』11: 15-37 頁.

Hashimoto, Mantaro J. 1967. The hP'ags-pa transcription of Chinese plosives, *Monumenta Serica*, 26, pp.149-174.

² 『至元訳語』(『事林広記』所収)、『元典章』、各種碑文などにみえるモンゴル語の漢字音訳がそのような対応を示す。

³ この処置には『五音集韻』が参考にされた可能性がある。中村雅之 1993 を参照。

⁴ 服部 1946: 63-64 頁では、朝鮮資料に記された「俗音」を北京音と見なしている。そこにも声母の3項対立があることについては、外国人の弱みとして規範にしたがったためとする。

- Pulleyblank, Edwin G. 1970. Notes on the hP'ags-pa alphabet for Chinese. W.B.Henning Memorial Volume, pp.358-375. London: Lund Humphries.
- Cheng, Tsai-Fa 1985. Ancient Chinese and Early Mandarin. Journal of Chinese Linguistics Monograph series, 2. Berkeley: University of California at Berkeley.
- 中村雅之 1993. 『蒙古字韻』と『五音集韻』, 『中国語学』240:21-30 頁.
- 中村雅之 1994. 『蒙古字韻』と『古今韻会举要』, 『富山大学人文学部紀要』20:147-163 頁.